音楽科

自分らしく音楽を味わい、表現する児童の育成

1　研究主題について

(1)　主題設定の理由

これから先の不確実な、見通しがもちにくい社会の中では、一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識することが大切であるとされている。自分のよさや可能性は、他者と関わりながら学ぶことを通して、自分の存在を認められることや自分の表現に実感をもつことで見いだされるものである。音楽科は、自らの感性を働かせて音や音楽のよさを見いだし、表現を自分でつくりだしていく教科である。その学習プロセスの中で、感性を働かせながら、他者と関わり、互いの違いを認識することで、「自分らしさ」が見いだされていくと考える。

本校音楽科では、令和２年度より「自分の見方で音楽に向き合う児童の育成」を主題に、児童が音楽活動を通して感性を働かせ、音楽への意味理解を深めることで、音楽の美しさを追求する児童を育成することを目指してきた。研究の成果として、教材の提示方法や教師の言葉がけとタイミングを工夫することで、意欲の高まりや思考の深まりから「自分の見方」を更新する姿が見られた。さらに一部の児童では、教師の働きかけがなくとも、既習事項や経験を基にして、音楽と向き合い続ける姿が見られた。これらの児童が音楽と関わるプロセスをより具体的に分析すると、「自分らしく音楽を味わう」ことと「自分らしく表現する」ことを往還している様相が浮かび上がってきた。

小学校学習指導要領（平成２９年３月）においては、音楽科で育成する資質・能力として「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」が示されている。これは、児童が音楽科を学ぶ意味の中に、人々の生活において存在している様々な音や音楽と関わりを自ら築き、生活を豊かにしていくことが含まれていることを明示している。本研究における「自分らしく音楽を味わい、表現する」とは、音や音楽のよさや面白さ、美しさを自分の言葉や音楽表現で伝えようとすることであり、このような学習を積み重ねていくことで児童が音や音楽と関わりを自ら築くことができるようになると考えている。

以上のことから、本研究主題を設定した。

(2)　音楽科で目指す児童像

本研究の目指す「自分らしく音楽を味わい、表現する児童」とは、感性を働かせ、音楽のよさや面白さ、美しさなどを十分に味わうということと、感じ取ったよさを言語表現や音楽表現で他者に伝えることを往還している姿である。（図１）

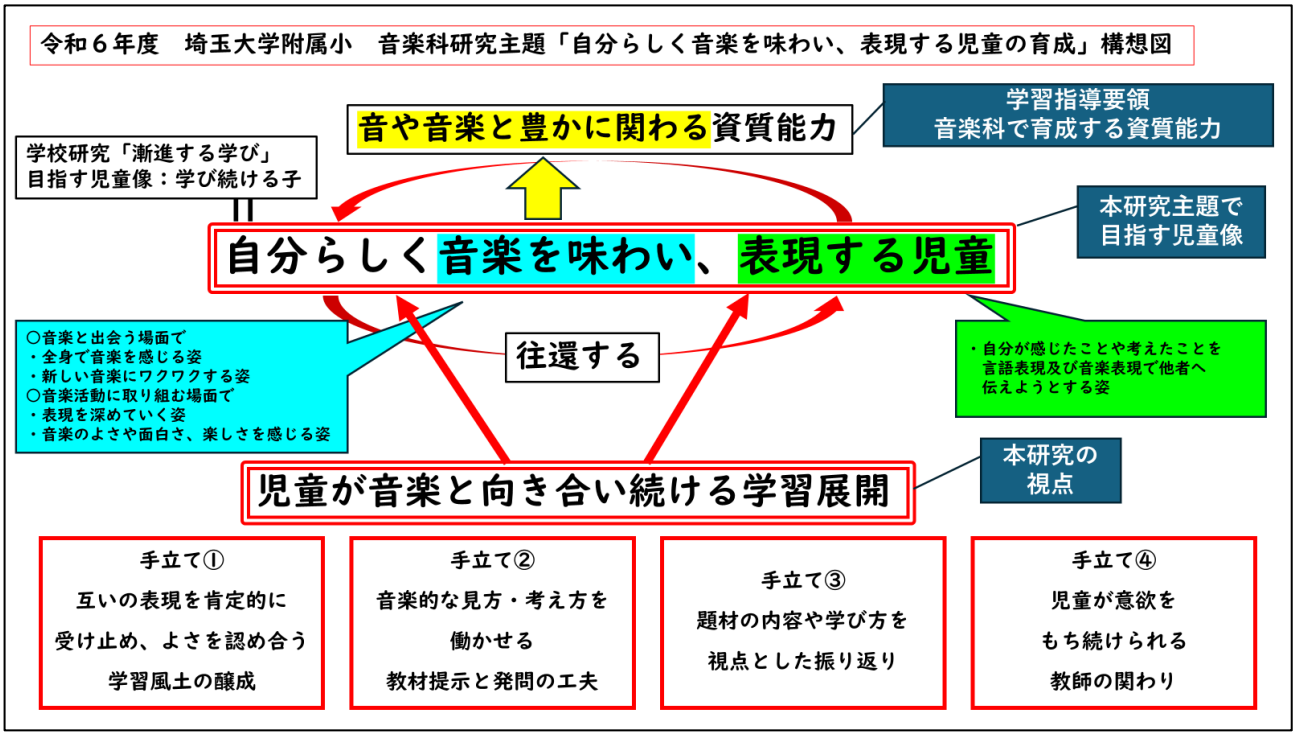


図１　本研究の構想図

「自分らしさ」は、既習や経験が異なる児童同士が学び合うことによって、互いの違いを認識することで浮かび上がってくるものである。例えば、ある音楽と出会った際、そのダイナミクスの豊かさから、自分が過去に経験した感動体験と結び付けて語る児童や、両手を大きく広げて響きの豊かさを表現する児童、ダイナミクスを引き立たせるような音楽表現を試す児童などが考えられる。これらの児童が同じ学習集団の中でともに学ぶことで、他者との違いを捉えて児童が自分のよさや可能性を認識し、より深い音楽の味わい方や、より自分らしい表現ができるようになってくると考える。

このように、一人一人の既習や経験が異なるからこそ、音楽と向き合い続ける中で生まれる「自分らしさ」を大切にしていくことは、これからの音楽科の学習において、一層重視されるべきものである。

(3)　本校研究主題との関わり

本校研究主題「漸進する学び」では、「学び続ける子」を目指す児童像とし、研究の視点を「目標をもてるようにする」として研究を進めている。本校音楽科では、音楽科における「目標」を音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取ることであると捉えている。これは、音楽を味わい、自分らしく表現するために必要不可欠なことである。

また、本校研究では、目標をもてるようにする要素として、①土台・風土②教材③教師の関わりが示されている。これを音楽科に当てはめると以下のようなものが挙げられる。

目標をもてるようにする要素	音楽科における具体例
土台・風土	・音楽から感じることは人それぞれであることに気付き、自分らしく表現してよいという心理的安全性の確保 ・題材導入時に教材や楽器などに十分触れる時間を確保し、「もっと」「なぜだろう」を起点とした学習展開
教材	・音楽的な見方・考え方を働かせたくなるような音素材や音楽素材の選択と提示方法
教師の関わり	・題材における思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素の視点での言葉がけ ・児童が見いだした音楽のよさや面白さ、美しさの価値付け

図２　学校研究の３要素と音楽科との関わり

上記の要素は全て、児童が感性を働かせ、音楽のよさや面白さ、美しさなどを十分に味わったり、感じ取ったよさを言語表現や音楽表現で他者に伝えようとしたりすることに欠かせないものである。そのため、音楽科の目指す姿に迫るためにも、学校研究との相関を大切にしていきたい。

２　主題にせまるための研究内容及び方法

音楽を味わい、自分らしく表現するためには、児童が音楽的な見方・考え方を働かせることが欠かせない。即ち、児童が音楽と向き合うことが大切である。また、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わるような児童を育成するためには、児童が主体的に音楽と向き合い続けるような学習展開にすることが必要である。

よって、主題にせまるために、以下のような視点と手立てを講じ、実践を行った。

視点

児童が音楽と向き合い続ける学習展開を工夫することで、自分らしく音楽を味わい、表現できるようにする。

手立て（１）互いの表現を肯定的に受け止め、よさを認め合う学習風土の醸成→　**事例１**

手立て（２）音楽的な見方・考え方を働かせる教材提示と発問の工夫　**→事例２**

手立て（３）題材の内容や学び方を視点とした学びの振り返り　**→事例１**

手立て（４）児童が意欲をもち続けられる教師の関わり　**→事例２**

（三橋　博道）